

自分の音を 客観的に聴く ことこそ

「美しい音」への道



山季布枝

やまき・のぶえ ●ウィーン国立音楽大学首席卒業。10年にわたるウィーン滞在中、バッハからロマン派前の各様指揮による演奏法をマスターする。現在、リサイタルの他、日本各地で「アンナ・マグダレーナ・バッハのクラヴィーア小品集」から「協奏曲」までの作品解釈をおこなう「バッハ・セミナー」を開催し各方面から賞賛されている。ホームページ <http://salondeart.com/yamaki/>

ウィーンで聴いた 「美しい音」

現代社会は、音なくしては成り立たないと言っても過言でないほど、すべてが音によって動いています。そして私たちは無意識に、心地よい音と耳障りな音の中に身を置いていきます。これだけ音が溢れる中で、私たちは「美しい音」に囲まれているでしょうか。

私たちが演奏する作品を書いた作曲家たちは、どんな音を聞いていたのでしょうか。そんなことを考えたことはありませんか。モーツァルトやベートーヴェンが出していたであろう音や聴いていた音を、想像したことはありますか。音楽を学ぶ我々は、日頃から音に対して色々なイメージを持ち、かつ敏感でいたいものです。日本での住環境と欧米のそれには大きな違いがあります。筆者が初めてウィーンで生活したとき、石畳を歩く人々の靴音が、両側の石造りの建物に響き、なんとも心地よい気分になったことを今でもよく思い出します。下宿で初めてピアノの音を出した時の、その響き豊かな音に、自分で自分の音に酔ったことも懐かしい思い出です。力むことも不要で、あまりにも良く響き、楽に弾けるので、自分の技量を勘違いして軽く弾くことを取り違え、上っ面だけのタッチで演奏して、先生に「打鍵は下までしっかり」とご注意

を受けました。

外来演奏家の演奏を聴いて「なぜこのように柔らかく響き豊かに、なおかつ軽く楽なスタンスで演奏できるのだろうか」と思われた方も多くいらっしゃると思います。筆者が恩師のレッスンで感銘を受けた音を言葉で表現するとすれば、それはあたたかも、最上で大粒の真珠によるネックレスをイメージする音でした。一粒一粒（一音一音）が美しい輝きをもった、巻き厚い（豊かな響きを持った）大粒の真珠（音）が連なったネックレス（音の連続）でした。

私たちが 音楽に求めるもの

昔から多くの賢人たちは「音楽は音を楽しむのであって、音が苦にならないように」と言いました。クラシックの音楽会へ足を運んだ人たちが、「目を見張る演奏技術だったけれど、音は汚く、聴いていて苦しくなってしまう」という感想を漏らすのを耳にしたことはありませんか。

私たちは音楽に何を求めているのでしょうか。ある人は、日頃の喧騒から逃れて、楽の調べに身を浸したいと思って「美しい音」の世界を求めます。ある人は、楽しさや、癒される時間と空間を求めにいらっしやるでしょう。またある人は、難曲といわれる作品を演奏する、奏

者の見事なテクニクを期待していらつしやる場合もあります。

しかしピアノに限らず、音楽は、「先に音ありき」です。高名な教授の言葉をもつてすれば、「我々にとつての音は、画家にとつての絵の具」です。私たちは「美しい音」という絵の具をどれくらい持っているでしょうか。

さあ、今回は我々がめざす、少しでも良い音、「美しい音」について考えてみましょう。

「美しい音」のために

①「耳の位置」を意識して座る

先ずは姿勢が大切です（イラスト参照）。背中が板のように硬く真っ直ぐでも、前傾姿勢でも、猫背でも、頭だけを下げ過ぎてもいけません。一度ピアノの前に座つてこの悪い姿勢を試してみてください。背中を丸めたり、頭の位置を低くしたり、顔を真下にして、そのままの姿勢で音を出してみましょう。

今度は良い姿勢——力を入れ過ぎずに背中を真っ直ぐにし、顔を真正面に向け、視線だけ落とすような姿勢で音を出してみましよう。いかがですか。「耳の位置」が変わるので、音の聴こえ方が確実に違うはずですよ。

耳の位置を今まで意識したことはありませんか。この「意識」から、まず自分の

音を聴くという美しい音を出すための肝心なことがスタートします。「聴くこと」と「聞こえる」のは全く違います。その意識によってこそ「美しい音」や「色彩感のある音」、自分の「意のままの音」を出せるようになるのです。この感覚を、初めてピアノを学ぶ人たちにも、しっかりと伝えたいものです。

姿勢について、私は「背筋を伸ばす」という言葉を使うと、必要以上に背中に力を入れて、逆に硬くなってしまう生徒さんを多く見てきましたので、「胃を伸ばす感覚」と指導しています。

②自分の音を消え入るまで聴く

よい姿勢ができたなら、何も考えずにいつも通りに1音を出してみましょう。そして自分の出した音を出た瞬間から消え入るまで良く聴いてください。

この単純な行為を自分の音のチェックとして、常日頃実行していますか。また生徒さんの音も聴いていますか。

③同じ指で同じ音を2回続けて弾く

今度は美しい音をだそうと極力意識して、ポーンと丸みがあつて、かつ芯のある豊かな響きを伴った音を出してみましょう。

美しい音が1音出たら、ゆっくりと同じ指で2回続けて出してみましょう。1回目と2回目は同じ音質、同じ音重たつたでしょうか。1回目が大きかったり、2回目が最初の音より鳴りが悪かった

り、という不揃いな音が出てしまったらやり直しです。

打鍵のイメージは鍵盤を真下に落し下げるといふ感覚です。ピアノ演奏は上部雑音（鍵盤と指が触れる際の音）と下部雑音（棚板の音）が楽音と一緒に発せられる混合音によってでき上がります。しかしこの二種類の雑音も少なければ少ないほど良いのです。となれば、鍵盤に振り下ろされる際の「指が鍵盤に当たる音」、すなわち上部雑音を軽減させるべきです。そのためには、鍵盤に指を密着させたまま音を出すタッチの方がはるかに雑音の少ない音になりますね。

フォルテ（*f*）とピアノ（*p*）の差が、打鍵速度の差であることはご存知の通りです。美しい音でのフォルテは、腕の重みを利用して無駄なく指先に速く伝えてエネルギーにします。

また美しい音での演奏には、音の均一性も重要です。不揃いな音の連続こそが、汚い音をイメージさせます。またリズムの不均等も同じイメージを植え付けます。

音階練習をするとき、すべての音が揃っていますか。ある音だけ突出していませんか。その反対に、出ない音があったりしていませんか。1オクターヴの音階練習で構いませんので、タッチの種類を変えて毎日することをお勧めします（レガート、ノンレガート、スタッカート、フォルテ、ピアノ）。

ピアノの中のシステムとタッチ

ピアノは、鍵盤を約10ミリ押し下げると何をするかによって、音にすべての命が吹き込まれる楽器です。

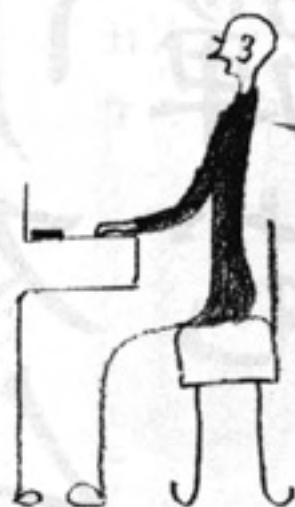
その10ミリの行為がハンマーに伝わり、ハンマーが弦を叩き、弦が振動し、大きなピアノの鉄骨フレームに伝わり、微妙にアーチ状になった響板がまた振動し、音が立ち上がり私たちの耳に届くのです。このシステムを度外視して美しい音は出せません。

もっと正確に言えば、ハンマーが弦を打つのは鍵盤を約5ミリ押し下げた所です。その残りはアフタータッチといって、この5ミリにどれだけ力を込めても音は変わりません。ですから厳密に言えば、美しい音を出すには、ハンマーが弦を打つまでの約5ミリに集中しなくてはならないのです。

また、たった平均50グラムの鍵盤を下ろすためには、腕の重みとスピードは必要ですがボディビルで鍛えたような腕までは必要ありません。必要以上の反動をつけて叩いたり、指を高々とあげて過剰なスピードをつける必要はありません。タッチは、さきほど触れたように、「真下に真っ直ぐおろすタッチ」が基本です。約5ミリ押し下げたところで音が発生した後は、鍵盤に指を置いたまま

「耳の位置」を確かめよう

●イラスト・山季布枝



背中もピーン



顔を真下



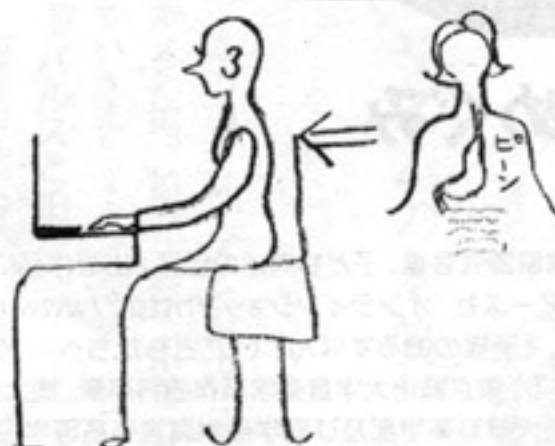
前傾姿勢



頭の位置を低く



背中を丸める猫背



胃をピーンとのぼす

力を抜きます。この時の脱力が上手くい
つていると、鍵盤が勝手にタッチした指
を押し上げてくれるので、わざわざ自分
が（次の音が余程跳躍していない限り）
鍵盤より先に指や手を上げる必要はない

のです。そして次の音を鳴らすべく、次
の鍵盤に滑らかに移り、鍵盤の上に指を
置き、また鍵盤を押し下げ、約5ミリ下
げたところでハンマーが弦を打ち鳴らし
ます。

他には手前に引つ張るような感覚のタ
ッチ、鍵盤の奥の方向へ押しこむような
タッチがあります。

また、鍵盤のどのあたりを押すか、と
いうことも大切です。メーカーによって
違いはありますが（だいたい白鍵は約15
センチメートル、黒鍵は約9センチメー
トル）、鍵盤の奥から手前まで、どこを
タッチしても良いのです。前後の音の関
連で、「鍵盤の手前で弾く」ことが常に
当てはまるとは限りません。子どもでも
大人でも手の大きさは百人百通りです。
自分の指がリラクセスして、先に述べた
ような、響き豊かな芯のある美しい音が
出せるのであれば、この「鍵盤の手前で
弾く」ことにがんじがらめにならないこ
とです。

どの位置のタッチがよいのか、指使い
と同時に考えましょう。そして指先のど
こで弾くのか——指先のほんの先の部分
で弾くのか（細かいパッセージやスタッ
カート、レグジェーロなど）、それとも
指全体の、いわゆる指の腹という部分を
使って弾くのか、または指の面を使うと
いう感覚で弾くのか（たっぷりした音量
を出したり、レガートなど）、鍵盤に触
れる指の表面積の問題も考えましょう。

美しい音への

「意識」が大切

美しい音を出すためのノウハウはなか

なか文字では説明し難いものです。まし
て1台のピアノを10人の名演奏家が演奏
しても、10通りの美しい音が出るのがピ
アノです。何をもち「美しい音」とい
うのかという価値判断も難しいところで
すが、自分の音を客観的に聴き、批判で
きるこそ「美しい音」への道ではな
いでしょうか。美しい音を出そうとする
「意識」が、延いてはタッチに影響し、
無意識に筋肉を弛緩させていきます。筋
肉が緊張すると、自分のイメージを指先
に伝えにくくなります。緊張を解いた腕
をしつかり支えるために姿勢を良くし、
腕全体の重みをストレートに指先に伝え
ることが肝心なのです。

幼い子どもの演奏に接した時、技術が
いくら拙くとも、穏やかな丸みのある
「美しい音」を聴くことがあります。そ
れは我々をとっても和ませてくれます。一
方で、達者に演奏するのに、音が汚くて
残念な演奏だったという場合もあります。

急に「美しい音」が出るようにはなり
ません。常に意識、練
習が必要です。レッス
ンで先生方がお弾きに
なる音が美しくなけれ
ば、生徒さんに「美し
い音」の出し方はお伝
えできません。たった
一音でもよいですから、
響き豊かな、芯のある
「美しい音」を出すよう
に心掛けましょう。

コンサート情報

●山季布枝と素敵な仲間たち
2007年3月26日(月) 18:00開演 紀尾井ホール
問：紀尾井ホール(TEL 03-3237-0061)